

北の近世を旅する…

「海の道」の贈り物。

円空仏

寛永9年(1632)美濃で生まれた円空は、臨済宗の僧侶として飛騨や尾張で修行しながら仏像を作って歩いた。

寛文5年(1665)頃、北海道に渡り2ヵ年ほど滞在し、その足跡は西は太田、東は有珠にまで及んでいる。現在、道内には42体の仏像が確認されており、そのうち6体が観音堂や町内の社寺に保存されている。明治はじめの神仏分離の際、上ノ国の円空仏も棄却の運命にあったのを、当時の村人が隠して棄却の運命を免れ今日に至っているものが多い。

円空仏のやさしい微笑みは見る人の心を和ませ、どんなにか人々の心に慰めを与えたことだろう。子供と一緒に遊んだとか、病気のときには煎じて呑んだという話も伝えられている。



撮影:三沢建築写真事務所



旧笹浪家住宅主屋・付属土蔵

笹浪家は上ノ国で代々鯨漁などの漁業を営んできた家柄である。初代久右衛門は享保年間(1716~1736)に能登国笹浪村から松前郡福山に移った後、上ノ国に移り住んだ。当主は代々久右衛門を襲名。屋号を「△(ほしやまに)能登屋」と称した。

現在の主屋の建築年代は、旧笹浪家古文書の「家督普請扣(かどくふしんひかえ)」に安政4年(1857)に家の土台替え、翌年に屋根の葺き替えを行なったことが記されており、1800年代初めの建築であると認められる。

江戸時代末の八代目は名主を勤め、明治期には漁業を営むかたわら、水田を開いたり、公職を兼ねるなどこの地方の指導者としての役割を果たし、「全道中の漁家の旧家」と評された。北海道で現存する最古の民家建築である。(国重要文化財)

かみのくに歴史散歩

文治5年(1189)源頼朝による平泉藤原泰衡追討の折、その難を逃れ津軽、糠部の人々が余市から鶴川の間に移り住んだと伝えられている。これらの人々は、15世紀頃までに道南の津軽海峡から日本海側沿岸一帯に館と呼ばれる山城を築き、そこを拠点として活発な交易を行ない、支配地の拡大を図っていた。

当時、松前から西の日本海側を上、松前から東の太平洋側を下と呼んでいたが、後には上ノ国の名がこの地域に限定され、ここ上ノ国の地名の由来になったとの説もある。

長禄元年(1457)コシャマインの戦いが起こり、道南の諸館が次々攻め落とされ、下之国の茂別館と上之国の花沢館が残るだけとなったが、花沢館の客将武田信広が目覚ましい活躍をし、和人地の危機を救ったという。その後、信広は道南の各館主の信任を得て蛎崎家を継ぎ、後の松前氏の基礎を作ることになる。

永正11年(1514)二代光広は松前に本拠地を移し、秋田檜山の安藤氏に使者を送り、代官としての地位を認められ、名実ともに蝦夷島の現地支配者となった。その後知内から上ノ国までが和人地となった。

上ノ国の勝山館には松前の大館に対し脇館として城代が置かれたが、鮭などの資源を持つ天の川やその河口の潟湖、天然の良港大潤湾等の港湾施設を持つ上ノ国は、本拠地を松前に移してもなお、松前と並ぶ勢力を保ち続け、慶長年間の頃まで日本海側における軍事、交易の拠点として重要な役割を果たし続けた。その後、その役割は檜山番所に受け継がれ、延宝6年(1678)江差に檜山番所が移るまで賑わいをみせた。

阿弥陀如来像

明治の初め頃、久遠から奥尻に行く途中、漁民が海中から拾い上げたものという。(町所蔵・町指定有形文化財)



観音坐像

明治はじめの神仏分離の際、仏像に烏帽子、直垂をつけて棄却の難を免れ、今日に至る。(石崎八幡神社所蔵・町指定有形文化財)



十一面観音立像

150cmの大作で、道内にある仏像のうちで唯一の十一面観音立像。明治はじめの神仏分離の際、村人が隠して事無きを得、現在、観音講の人たちにより大切に保存され、篤い信仰を受けている。(上ノ国観音堂所蔵・道指定有形文化財)